

ハンス・リップスにおける「諦め」の実存哲学

田 中 潤 一

はじめに

本論文の目的は現代ドイツの哲学者ハンス・リップス (Hans Lipps, 1889-1941) の思想の根底にある人間的実存の概念について考察することにある。ハンス・リップスは『認識の現象学研究』[1927], 『解釈学的論理学研究』[1938], 『人間の本性』[1941] の3冊の書物を上梓しているが、前2著では認識論・論理学が展開され、最後の書籍では人間学的な省察がなされている。すでに拙論[田中, 2023]においてこの両側面には「人間的自由」という観点を基にした一貫性が存していることを明らかにしたが、本論文ではさらにリップスの1930年代の諸論文を解読することにより、リップス哲学の根底に存する世界観・人間観まで辿り着き、リップスがどのような哲学的基盤を有していたかを解明する。具体的には、「実存」概念について詳細に論じるのであるが、リップスは前掲の3冊の著作において「実存」についてほとんど述べていない。しかし1930年代の論文においては実存概念が分析対象とされており、これらの諸論文の内容を解明することによってリップスの思想的な根源を明らかにすることが見込まれる。本論文で分析対象とするのは、リップス著作集第5巻の下記の論文である。

「自然の形態学」1932年

「[原始的なもの]の体験の仕方」1929年

「プラグマティズムと実存哲学」1937年

「科学研究の意義」1937年

「視点と実存」1937年

「責任、責を負うこと、罰」1937年

「自然民族における現実性」1939年

「ゲーテの色彩論」1939年

元々リップスは自然科学研究から出発していることに加え、これらの論文の多くは科学について論じられていることを考えれば、当時西洋で流行し学問的に大きな潮流になりつつあった自然科学的な見方に対して肯定的に紹介されているかと思われるかもしれない。しかし実際は必ずしもそうではない。むしろ逆にリップスは自然科学的な見方に警鐘を鳴らしている。「原始的なもの」などに関する論文も同時に執筆されていることから、リップスは科学的なデータ分析が今後の世界観を構築するのではなく、逆に近代科学が普及する以前の世界で暮らしている人々が有しているような見方こそが、人間が本来有している見方であるとさえ考えている。本論文ではリップスが自然科学に対抗しつつ、人間的な実存を独自の立場から定め、さらに真理観を構築していると考え、リップスにおける実存概念の意義について論じる。その際に一つのメルクマールとなるのが「諦め」(Resignation)である。リップス実存哲学の根底には「諦め」という姿勢が常に見られるのであるが、その意義について見ていきたい。

同時にもう一つ本論文において行いたいことがある。それはリップスに影響を与えたのがゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832) であるということの解明である。リップス自身ハイデガー (Martin Heidegger, 1889-1976) の弟子であり、また彼の著作の所々にハイデガーから借用したとも思える概念が使用されている。しかし拙論 [田中, 2022] でも述べたように、必ずしもリップスの考えはハイデガーと完全に一致するのではない。「言葉の謎」や「パラレルによる解明」など独自の思惟をリップスは展開している。本論文で筆者は、ゲーテの色彩論がリップスに決定的な影響を与えていると仮説を立て、議論を展開したい。一見さまざまな用語においてハイデガーから強い影響を受けているように見えるものの、哲学的な諸概念においてリップスはゲーテ色彩論の影響をより色濃く受けている。さらにリップスの世界観・実存観を探究する

と、「謎」あるいは「魔術的なもの」という不可知的な次元に突き当たり、さらにリップスは人間の実存のとるべき態度を示唆しているのであるが、この意義についてリップス哲学全体の意義と関連させて論じたい。

1. 「諦め」としての実存哲学

(a) 実存哲学の独自性

リップスは「プラグマティズムと実存哲学」（1937）において実存哲学について論じている。リップスは主要3著作や、ほとんどの論文において哲学史を解説するという論述スタイルをとっていないのであるが、この論文においては珍しく哲学史的な知識を参照しつつ論を展開している。具体的にはキルケゴール（Søren Aabye Kierkegaard, 1813-1855）、ニーチェ（Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844-1900）、ハイデガーの他、デューイ（John Dewey, 1859-1952）らのプラグマティズムの議論を参考にしながら、実存哲学について論じている。まずリップスは実存哲学が当時エポックメイキングな特徴を有していたと高く評価する。その理由は実存哲学は従来の哲学が前提としてきた教説を否定し、新しい見地をもたらしているからであるが、従来の哲学が前提としてきた教説とは何であろうか。リップスは従来の哲学の代表例としてデカルト（René Descartes, 1596-1650）を挙げ、次のように述べる。「この哲学（-引用者注-デカルト哲学）は、生と死の間で分たれる私の現存在やこの実存の現実性を抑圧した」（Lipps, V, S. 46）。「この哲学（-引用者注-現代の哲学）が単なる知識に還元されるということ自体が疑わしくなる」（Lipps, V, S. 38）。従来の哲学の特徴として、すべてを体系における知の一部としてしまうという点が挙げられ、それは「体系哲学」とも名付けられている。しかし体系哲学においては認識による知は固定的に考えられるようになり、「保管」という機能しか有さなくなってしまう（Lipps, V, S. 41）。このような態度によって人間は現実性を見失ってしまうことになる。

これに対して人間と物との関わりは「保管」ではなく、「実践」であるべき

という立場が20世紀になって現れた。この代表的立場がプラグマティズムである。リップスはプラグマティズム、とりわけデューイを高く評価している。「我々は物との付き合いにおいて最も身近なものとして自分自身に出会う」(Lipps, V, S. 40)。「たとえば物を扱うこと、それを望むこと、それを事柄として論争することにおいて、所有し、経験する。物は私に抵抗として示される」(Lipps, V, S. 41)。プラグマティズムにおいて物は単に孤立した対象として提示されるのではなく、常に日常的な連関の中にあるものとして捉えられる。真理は伝統的な意味での対象との一致ではなく、状況にその都度一致していることを意味するようになる。さらにプラグマティズムでは、真理には「修正」という側面が常に存するとされている。真理は恒常的に存するのではなく、絶えず状況によって変化し、常に「修正」されねばならない(Lipps, V, S. 45)。同時にリップスはプラグマティズムにおける真理観から、「他者」の契機も読み取っている。「真理は共同的にのみ体験することができる。認識は他の人による修正と必要とする」(Lipps, V, S. 43)。

(b) 「解釈としての認識」から「実存の自己発見」へ

このようにリップスはプラグマティズムを高く評価するものの、その立場を自らの立場としてそのまま受け入れることはしていない。リップスは自らが議論の俎上にあげる実存哲学とプラグマティズムとの相違点を取り上げている。まずリップスはキルケゴールとニーチェを実存哲学の代表例として取り上げる。両者に共通する思惟として、「認識することは解釈することである」という点を挙げている。「この「解釈すること」とは、明るみに出す理解を意味し、私たちの存在の最初に隠蔽された根拠を、覆い払い可視的にすることを意味する」(Lipps, V, S. 39)。つまり認識することとは恒常的な次元へ到達することではなく、常に変化するものであり、その都度の観点から解釈されるものなのである。この点においてリップスはプラグマティズムと実存哲学には親和性があるとしている。しかしリップスは実存哲学とプラグマティズムを同一視しない。さらに言えば、実存哲学の方がより深みがあるとすら考えている。それで

はそのような実存哲学の優位とはどのようなものであろうか。

実存哲学は自らの課題として、人間の「運命」や「本来性」を明らかにしようとしているとリップスは考える。実存哲学は単に認識の相対性を述べる立場に留まるのではなく、人間の実存の有り様そのものを捉えようとする。「実存哲学は事柄的に正しさに引き戻すのではなく、自分自身の偽装から私を連れ戻してくれる限り、私を定立するのである」(Lipps, V, S. 46)。実存哲学は「啓蒙」することなどを自己目的としているのではなく、自己の本来のあり方を指し示すだけであるとリップスは考える (Lipps, V, S. 45)。「正直とは、自分の根源に自分を当てはめ、自分が本来的に何であるかに直面することである」(Lipps, V, S. 50)。リップスはここに本来の哲学のあり方を見てとる。自己のあり方に出会う時、我々は興奮に襲われる。プラトンが語ったように「驚き」こそが哲学なのであるが、体系的な知を学び取ることが哲学なのでなく、自己の根源と出会うことに真の「驚き」が存する。

(c) 人間の実存の時熟、そして「諦め」

キルケゴールにおいても、ニーチェにおいても同様の思惟が見られるが、リップスはとりわけハイデガーに着目する。それではリップスはなぜハイデガーに着目するのであろうか。そしてリップス自身の哲学形成においてハイデガーの実存観はどのような影響を与えているのであろうか。リップスのハイデガー論を辿りながら、リップスの独自性を見る。まずリップスがハイデガーの「時間性」概念を重視していることに注意したい。現存在の本来性は、何かの背後に隠れていたりするのではない。人間はその都度その都度の「時」において存している。時間が人間の実存に対して開かれているのではなく、むしろ人間の実存が時間の中で開かれているのである。ここで意味されているのは人間の実存が、自らを全く新しく創り出していくということではない。そのような単純な自己形成論がハイデガーにおいて展開されるのではない。事態はより根源的である。人間の実存はいわば時間の中に投げ出されており、人間の実存はそのような自己を「発見」するのである。「私は開かれた問いとして自分自身

を発見する」(Lipps, V, S. 48)。「時間性はまさにこの自己性を「作る」」(Lipps, V, S. 49)。ハイデガーの解釈学理論として一般に取り上げられる「被投的企投」の概念では、人間の実存は歴史的状况に制約されながらもその非拘束性の中で自己形成するのであるが、リップスはハイデガーの実存哲学を継承している¹⁾。

このような時間性における人間の実存からリップスは人間の有り様を、「諦めている」(aufgegeben) (Lipps, V, S. 47) と定める。人間はその都度の自己の状態(「情態性(Befindlichkeit)」)において存しているのであるが、ここに人間の実存が存している、この「情態性」とは自己の対象として存するのでも、単なる状況として存するのでもない。「現存在は「情態性」として、自己と溶け合っている。したがって時間性は現存在との一体で説明される」(Lipps, V, S. 47)。人間の実存は時間において自己の有り様を受け入れ、自己を発見する。これは「私は何らかの将来に向けて振る舞っているのではない」(Lipps, V, S. 48)。人間の実存がその都度自己を発見することを意味しているのである。このようにその都度その都度に自己発見していくことが「時熟」(zeitigt sich)と呼ばれ、そのような自己を受け入れることを「責任」とも述べている。

自己の有り様を受け入れることに人間の実存の本来のあり方が見てとられるのであるが、これは新たに自己を作り出すのではなく、「諦め」であるとリップスは表現している。このようにリップスは独特のハイデガー解釈を通して実存哲学の探究を進め、人間の実存のありようを「諦め」に見て取るのであるが、このような姿勢は彼の科学論、倫理学にも通底するところがある。

2 科学と人間の実存

このようにリップスは独自の实存観を有しているのであるが、その実存観を基にして独自の科学論、倫理思想を展開している。リップスは独自の科学論・倫理思想を展開しながら、さらに自らの実存観を深めている。まずはリップスの科学論と実存観の関連について見ていく。科学について主に論じているのは、「自然の形態学」(1932)、「科学研究の意義」(1937)、「視点と実存」(1937)

の3論文であるが、これらの論文における科学と実存との関係性について考察する。

(a) 「真理」か「正当性」か

リップスは自然科学者として出発しながらも、当時の自然科学に対して批判的である。まず自然科学的なものの見方を「視点」(Standpunkt)と名付けている。視点の特徴として次の点が挙げられている。「視点は何か事柄的なものである。視点は匿名である。それらの視点は実証可能であり、証明可能である」(Lipps, V, S. 63)。現実性にはさまざまな側面が含まれているが、自然科学的な見方は一つの視点に限定し、その視点から現実を判断する。例えば病気における診断や、裁判における判決などである。ここでは「事前に形作られた概念に基づいて体系的な価値をその事例に当てはめる」(Lipps, V, S. 63)ということがなされる。このような姿勢は、ある概念体系を事前に作成し、その概念体系をここの事例に適用していくという態度である。この態度は現実を一つの基準に基づいてのみ判定しているという点で、「事柄的」である。また現実を事柄によって判断することによって、数量化が行われ、現実是谁のものでもない「匿名的な」ものとなる。このような視点によって現実とは「正しいか否か」ということのみが判定されるようになる。つまり「視点」のもとでは「正当性」のみが問われる。

しかしそれに対してリップスは、「視点」では人間と物との関係が保持されないとする。それではどのような姿勢や態度によって人間は物との関係を築くことができるのであろうか。リップスは「視点」に変えて、「確信」という態度を提示する。「我々は確信を生きている」(Lipps, V, S. 64)。「我々が生きている確信は、実存そのものが自らを条件の下に置き、自分自身を無条件のものとして捉える方向性への決定である」(Lipps, V, S. 66)。ひとは自分の外に存する客観的な基準によって現実を把握するのではなく、自分自身の有している信念を基に現実世界と関わる。人間の実存は「視点」から自由にならなければならない。そして「確信」によって世界を「正当性」として捉えるのではなく、

「真理」として捉えるようになる。

しかしリップスはこのような「真理」か「正当性」か、という議論において、当時流行していたような「精神科学」と「自然科学」（あるいは「文化科学」と「自然科学」）というような二分法的な学問論を展開することを目的とするのではない。ここで実はリップスは「実存」を隠れた課題として論じている。「確信は自分自身において審級を持っている」（Lipps, V, S. 64）。「すべての確信は、決定的確信である。しかし私は自分の確信の可能性において開示される」（Lipps, V, S. 65）。確信は人間の実存の自己において成立する。人は自らの確信を基にして自らの可能性を選び取ることによって、真理を獲得するのであり、「視点」あるいは「正当性」では到達できない世界との関わりを得ることができる。しかしその根底には人間の実存が自らの可能性を選び取るという態度が前提とされているのである。リップスは科学的な物の見方を批判しながら、同時に独自の实存観を展開している。

(b) 科学観の転換と科学を支える人間の実存

このようにリップスは科学的な見方を支えている実存のあり方、さらに人間の実存から再び現実そのものを捉え直すことによって、世界と人間の実存との関係を再び結びつけようとする。つまりリップスは、自然科学と精神科学（あるいは文化科学）を分類して、前者を批判し後者を評価するという単純な議論を展開しているのではなく、自然科学的な態度にも実は人間の実存の有り様が潜んでいて考えている。それではリップスはどのような科学観を有しているのでしょうか。リップスは次のように言う。「時間的に生まれたものとして、科学は本質的に問いにおいて立っている」（Lipps, V, S. 54）。科学における知は決して固定的なものであってはならない。つまり単に機械的に「正当性」を吟味するだけのものであってはならない。科学的な知は常に「問い」において立てられ、絶えずそのあり方を問われねばならない。さらに認識には常に新たな対立がなければならぬとも述べている。

リップスはこのように科学とは固定的な知の体系ではなく、流動的な側面を

有していると考えているが、同時にリップスはこのような科学知を成り立たせるのは、他ならぬ人間の実存であるとする。「認識する人間から独立して、真理が存在するのではない」「我々自身が事柄を目覚めさせる」（Lipps, V, S. 58）。それでは人間の実存にはどのような特性が備わっているのであろうか。リップスはとりわけ「自由」を重視する。人間の有する自由こそが、さまざまな未来を呼び起こす。人間の実存が自由を有し、科学を新たに作り出していくことによって、「真理とは、具体的な人間性が責任を負う実存形態である」（Lipps, V, S. 58）とされる。

（c）博物誌の再考、そして「謎なるもの」の残存

さらにリップスは「博物誌」（Naturgeschichte）から「自然科学」へと移行した歴史の変遷を考察しながら、この変遷において見失われた視座を再発見しようとする。先述のように、自然科学は数量的なデータによって作成され、匿名的な性質であると考えられている。しかしリップスは自然科学においても、匿名性によって全てが解明されることはないと考えている。「自然科学を行うことは、人間の実存の自由に選択された態度の一つである。科学は世界との特別な関係に基づいており、……特定の人生観の主権の中で把握することもできる。真理の事柄性と証明可能性の要求に潜むパトスを見逃してはならない」（Lipps, V, S. 9）。つまり科学的な態度は決して匿名的ではなく、むしろ人間の実存によって遂行されるのであるが、人間の実存の有する「パトス」が決定的な役割を果たす時までリップスは述べている。

例えば近代生物分類学の祖リンネ（Carl von Linné, 1707-1778）についてリップスは評価するのであるが、一般的な評価とは異なり、リンネが統一的な体系を作り出したことを評価するのではない。リップスは、リンネ自身も特定の時代精神を負っており、イデオロギー的な態度を持っていたことに着目する。この点においてリップスは自然科学成立以前の博物誌を評価する。博物誌研究者は体系的な知を目指すのではなく、自らの目の現象を報告することを自らの仕事としていた。その際博物誌研究者にとって必ずしも明白な結果ばか

りが得られたのではなく、説明がつかない「奇妙なもの」「珍しいもの」が見出されることもあった。しかし博物誌研究者はそれら未解明なものを無理に解明しようとするのではなく、「謎」を「謎」として残した。（「博物誌は、通常の基準では失敗する物の知識を伝える限りにおいて、謎のためのスペース（Raum für das Geheimnis）を作った。……美的考察はこれに結びついている」（Lipps, V, S. 12)）。つまり近代科学のように個別の現実的諸現象を一般概念に当てはめるのではなく、現実そのものが教説（Lehre）を指し示していると考え、解明できないものを残しておく。解明できない「謎」はただ感官によって捉えられ、それは決して論理化できない次元として残存され、またしばしば「美」の問題として扱われていた。近代科学はこのようなパトスや感官を極力排除しようとするのに対して、博物誌はあえて「謎」を残してきた。リップスはこのような博物誌の研究姿勢を振り返ることによって、科学の解明は人間の実存による遂行に依って物事を明らかにすると同時に、単に人間の実存に全てを還元するように主張するのではない。ここにおいて我々は先述した「諦めとしての実存哲学」と共通する思惟を読み取ることができる。リップスにとって実存哲学とは、単に実存によって全てを定立することを意味するのではなく、不可知なものをそのまま残存することを許容するという「諦め」の姿勢が見られる。

3 倫理観と人間の実存

次にリップスの倫理観における人間の実存について考察する。リップスが倫理学について述べている論文はほとんどないが、唯一「責任、責を負うこと、罰」（1937）において倫理的な観点が論じられている。この論文は罰という法哲学的な課題が論じられているが、同時に罰のあり方を通して人間の実存のあり方について省察している。

(a) 「責任」と「責を負うこと」

まずリップスが「責任」（Verantwortung）と「責を負うこと」（Zurechnung）

を区分していることに注意したい。リップスは両者の間に大きな違いがあるとしている。まず「責を負うこと」からみたい。「責を負う」ことは「代償を支払う」とセットで捉えられるとされている。リップスが出す例では、公務員は自分の職務に対して責を負う、あるいは犬の飼い主は自分の犬が与えた損害に対して責を負う（Lipps, V, S. 77）などである。つまり誰がある者が行う行為に対して瑕疵があった場合、その瑕疵に対して何らかの補償をしなければならぬということであり、いわば相殺関係を述べていると言える。「誰かに責を負わせること、自分自身に責を負わせること、～に対して代償を払わせること、それらは罰的な方法で「支払い」をさせることを意味する。私たちは愚かなことや間違いに対して罰せられる。私たちは、自信、妄想、虚栄の「代償」を支払わなければならない」（Lipps, V, S. 77）。ここでは瑕疵とその瑕疵に対する補償は一対一対応でしか考えられていない。

このような発想から罰を「報復」として捉える考えが生じることになる。罰を報復として捉えることによって、罰は「威嚇の手段」としての役割を果たすようになり、瑕疵を犯さないように人々を萎縮させる機能を有することになる。しかしリップスはこのような「罰」を否定的に見ている。「罰で萎縮させようとするのは、何か哀れなことである」（Lipps, V, S. 72）。

それに対してリップスは「責任」は異なる役割を有していると考える。それでは「責任」はどのような特性を有するのであろうか。リップスはここに人間本来のあり方を見てとる。先述のように「責を負う」ことは瑕疵に対する補償であり、罰によって「返済」することが求められる。しかし「責任」においては単に現状復帰が求められるのではない。リップスは、責任には「正当化」が求められると言う。ひとは自らの責任を単に代償的行為によって補うのではなく、自らが行った行為がなぜ行われたかを説明しなければならない。「被害を被った」と訴える人が、「私」を訴えるということによって、「私」がはじめて「定立」されることになる。私は自らの行った行為を傍観者的に「返済」するのではなく、その訴えの内容を自らのこととして受け止め、自らの行為を振り

返って見つめ直さなければならない。「つまり何が行われたかを、状況を考慮して、可能な限り要求に応えたという方向で根拠となる理由の補足において説明しようとする」(Lipps, V, S. 78)。

(b) 人間の実存と責任

ここにおいてリップスは責任に応えるということは、機械的な「現状復帰」ではなく、自分の実存を見つめ直すことに他ならないとしている。リップスは次のように述べている。「自己存在は、実存が責任的にやって来て、それ自体に戻ってくるということの中で起こる。つまり実存は、運命と罪悪感の中に「ある」ものとして、受け入れられているということである」(Lipps, V, S. 77)。人間の実存は何らかの瑕疵を犯した時、その瑕疵を自らの背後に追いやるのではなく、自らのこととして受け止めなければならない。(「罪において私たちは自分に結びついている」(Lipps, V, S. 77))。

このように「責任」を捉えることによって、人間の実存のあり方への考察が浮かび上がることになる。責任を問うことは、人間が自己の可能性をどのように企投したかを明らかにし、それは同時に人間には自由が存していることを示している。人間は確かにさまざまな可能性を持っているが、その中でも一つの可能性を選びとり決断する。そしてその自らが選んだ行為を自らのこととして引き受けなければならない。リップスは「私は自分の「可能性」に自分を基礎づける」(Lipps, V, S. 79)と言う。人間の実存は一つ一つの決断によって、自らを確立する。

しかしそれでは、罰に対して人間の実存はどのように対処するのであろうか。先述のように「返済」することによって、現状復帰させることが罰の目的なのではない。つまり罰によって人は容易に元に戻ることができるわけではないのである。リップスは次のように述べている。「我々が何かを担っている限りにおいて、我々は確定的になる。担うことは働きである。何かを担っている人は、消え去ることはない。そして私たちが結果として何かを担っている限り、単なる刑罰の対象から逃れることはできない」(Lipps, V, S. 80-81)。自ら

の行為の瑕疵を返済するのではなく、逆に自らの行為を罰として受け止め、その罰が消え去ることがないことを自覚しなければならない。瑕疵から逃げることはできないことを認め、その瑕疵を自ら受け止めることが「罰」である。このように罰を受け止めることのみが、「責任」として求められる態度なのであり、これは「諦め」とも言える態度である。ここにおいて、先に述べたリップスの実存哲学における「責任」論と共通した姿勢を見てとることができる。「プラグマティズムと実存哲学」（1937）においてリップスは独自の实存哲学を展開していたが、そこでは、人間の実存がその都度自己を発見することを「時熟」とよび、そのような自己を受け入れることを「責任」と名付けていた。ここでリップスは人間の実存のあり方を「諦め」と特徴づけていたが、「責任、責を負うこと、罰」（1937）における「責任」論においても、共通した立場を読み取ることができる。責任とは、何かに対する返済なのではなく、「諦め」として現れるのである。

4 リップス哲学の源流としてのゲーテ色彩論

さてこのようにリップスの実存哲学において、「諦め」が一つのメルクマールとなっていることが読み取れ、それは科学論・倫理観のいずれにおいても共通している姿勢である。さてリップスの実存哲学、とりわけ時間性の概念について、ハイデガーの『存在と時間』から大きな影響を受けていることは言うまでもない。しかし同時にリップスのハイデガー解釈が独自の解釈であることも事実である。本論文ではリップスにハイデガーが大きな影響を与えていることを当然ながら認めつつも、もう一人リップスに重要な影響を与えた人物を取り上げたい。それはゲーテである。リップスは1932年の「自然の形態論」においてゲーテに言及しているほか、1939年には「ゲーテの色彩論」という論文を執筆している。これらの叙述からは、単なる一時的な関心からゲーテを取り上げているのではなく、ゲーテがリップス哲学の形成に大きな影響を与えていることがわかる。どのようにゲーテがリップスに影響を与えたかを考察したい。

(a) 形態学から色彩論へ

リップスはゲーテの自然論について形態論と色彩論を取り上げて、それぞれの意義を論じている。リップスによると、ゲーテの形態論はこれまで高く評価されてきたが、色彩論はほとんど評価されていなかった。とりわけゲーテは同時代のニュートン (Isaac Newton, 1642-1727) の色彩論を批判するものの、後世への影響という点ではニュートンには及ばなかった。しかしながらゲーテの形態論もまた独自の思想であったとリップスは考える。まずゲーテの形態論を見てみると、ゲーテにとって動物の形態は「形成」(Bildung) として価値を持つ。たとえば魚の形態は、水という環境において形成されるとされる。魚の形態は、水の中で生きるように作られており、水という要素と切り離して考えることはできない。「動物はその要素によって支配されており、それはその形成と共に動物である」(Lipps, V, S. 110)。リップスは次のような例を出して説明している。タデのような陸上植物を水中で栽培するとき、タデは浮葉を形成し、気孔を水面に配置する (Lipps, V, S. 110)。つまり動植物は自らの形態を、環境を要素として自らに合うように形成するのである。

しかし動植物がそのような形態をなぜ有しているのかという理由については、リップスは不可知であるとする。「それは「天才と呼ばれる複合的な精神力によって」のみ突きつけることができる」(Lipps, V, S. 110)。しかしそれに対して色彩論においては事情が異なり、人間の主体が関係しているとリップスは考える。色彩論は人間の「見る」という行為によって成り立つのであるが、とりわけ人間が「見る」ことにおいて、人間の能動的な主体が働いている。動物の目は単なる「窪み」であり、自らの視界に対して「無関心」であるのに対して、人間の目は異なる。「人間の視覚には「見たい」という独自の目標がある。……本当の意味での目は、窪みの目の単なる働きと異なり、ステップアップ (Aufstufung)、つまり「転送」(acheminement) を意味する」(Lipps, V, S. 112)。

ここで注意しなければならないのが、リップスが「ステップアップ」

（Aufstufung）という語を使用していることである。ここでリップス哲学の主テーマである「解釈学的論理学」について振り返ってみたい。リップスは解釈学的論理学の構築において、形式論理学と自らの解釈学的論理学を区別して、形式論理学を「判断の形態論」、解釈学的論理学を「歩みの類型学」（Typik der Schritte）と名づけている（Lipps, II, S. 12）。形式論理学は対象を無時間的な範疇に当てはめて考察するだけであるのに対して、解釈学的論理学は実存が時間性において自らのその都度開示する有り様を解明している。（田中，2022，p 30），（田中，2018，p 46-49）。このように解釈学的論理学と形式論理学の対立、そしてゲーテ色彩論と形態論の対立を比べて見ると、基本的な対立構造も極めて似ており、さらに解釈学的論理学とゲーテ色彩論では「ステップアップ」・「歩み」という類似の用語が使用されており、形式論理学とゲーテ形態論では「形態論」という語がその特徴として使用されている。リップスが『解釈学的論理学』を上梓したのが1938年で、「ゲーテの色彩論」を執筆したのが1939年であることを考えれば、リップス哲学の形成にゲーテ色彩論研究が大きく関連していると見て間違いなであろう。

(b) 色自身の自己展開と「諦め」

それではゲーテの色彩論はどのような論であり、さらにリップスはそこにどのような意義を読み取っているのでしょうか。まず色はそれ自身が色を表しているとリップスは考える。つまり我々が外的で客観的な基準に照らし合わせて「この色は、〇〇色である」と判断するのではなく、色自身が自らを表しているとされる。「色はその成立を表に表す」（Lipps, V, S. 118）。さらに色自身が自己の根拠を自らのうちに有して、自己展開しているとも考えている。「色の場合、その成立は自己決定である。なぜなら色は、自分自身においてその成立を証言するという根拠を、自分自身の中に選び取っているからである。色の現象は「それ自身教説」である」（Lipps, V, S. 118）。色自身が自らを表し、それを人間が受け取ることになる。

それでは人間は色をどのように受け取るのでしょうか。それは物理学者が自

然を単なる客観的な対象として受け取るのとは異なる。色は人間にとって生き生きとした次元で受け取られるようになる。「見ることと聞くことにおいて生み出される純粋な関係の世界性が、絵画や音楽が存在する理由である」(Lipps, V, S. 114)。色や音が自己提示するのを人間の実存が受け取ることによって、その色や音の中に存している豊かな世界を人間は「美」として解釈することができる。例えば人はルビーレッドを「激情」として、あるいは青色を「冷たいもの」として解釈する。色の出現において現れている世界を、人がその出現のままに受け取ることによって「絵画」が生まれることになる。「色は端的に現象であり、現象として、それが真理であるかどうかをまさにその本質によって決めるということは、「認識の最も深い基礎の出発点」であり、画家のスタイルはそこに基づいている」(Lipps, V, S. 115)。

ここにリップスは「翻訳」という作業を取り上げている。翻訳とは単に語学上の話ではない。自然が示している世界そのものを、我々人間の実存が受け取る仕方を「翻訳」と名づけているのである。「人はすでに、本来的に開示され現実的である諸関係を翻訳している」(Lipps, V, S. 121)。「自然はそれ自身を翻訳しなければならない次元に強えられる」(Lipps, V, S. 122)。しかしここで一つ注目したい観点がある。それは「諦め」(Resignation)という観点をリップスが再び取り上げていることである。ゲーテの色彩論には、人間が根源的に現象に落ち着く時、そこに「諦め」が存していると述べている文章があるのだが、その文章をリップスは引用し独自の解釈を行う(Lipps, V, S. 120)。人間が自然の中に根源的な現象を認識するとき、自らの運命を同時に見てとることが可能になり、その背後に何も求めることができなくなり、ここに「諦め」が生じることになる、と。このように「諦め」を感得することは、人間が「美を表現すること」と同一の次元で語られるようになる。このような考えは、これまで本論文で見てきたリップスの実存観と一致する考えであり、リップスの実存哲学がゲーテ色彩論から大きな影響を受けていることがわかる。

(c) リップス哲学の源流としての色彩論

さてこのようにリップスの実存哲学がゲーテ色彩論から影響を受けていることを見たが、さらにリップス哲学とりわけ論理学がゲーテ色彩論から影響を受けていることを次に見たい。リップスの解釈学的論理学の主張を要約しながら、その影響関係を見ていきたい。『解釈学的論理学』の「命題論」においてリップスは主語・述語関係について述べている（田中，2018，p 52-53参照）。「語り」によって「命題」が生成され、論理化が生じるのであるが、その際に「主語」・「述語」の分化が起こる。その際リップスは主語と述語が固定的な対象として生まれるのではないと考える。リップスは主語の内容が「隠されて」いて、述語化（カテゴリーイン）によって隠されている内容が明るみに出されるとする。そして主語と述語の結びつけるのが「繫辞」であるとする。繫辞とは動詞であり、その都度の主語の有り様が固定されていくことによって命題が生成される。

さて我々がこの構造について考察する時、色彩論においてすでに類似した構造が述べられていることを見てとることができる。色彩論では、上記のように色そのものが自己を表現しようとし、色自身が「教説」とされており、色そのものが持つ世界が開示されていくのであるが、この構造は、主語が自己開示して述語化していく構造と極めて類似的である。さらに色が自己表示される際、「翻訳」というプロセスが存していると述べたが、翻訳は決して固定的なプロセスではなく、色そのもののその都度の自己開示であった。同様に論理学における「命題」生成においても、繫辞が重要な役割を有していたが、繫辞は主語・述語関係を固定化させるのではなく、動的に主語の自己展開を確立させる機能を有しており、「繫辞」と「翻訳」とはよく似た役割を有している。このようにリップス論理学における構造と、リップスのゲーテ色彩論解釈の構造には共通点が見られる。

もう1点共通点が見られる箇所がある。それは「パラレル」という観点である。リップスは次のようにゲーテを評価している。「ゲーテは帰納的に物事を

進めなかった。彼は類推で考えた。……むしろゲーテは、異なる事例間のパラレルにおいて、それらがまったく認識される方向性を最初に発見した」(Lipps, V, S. 124)。ゲーテは自らの理論形成において、帰納法を使わず類推という手法を用い、さらにパラレルという観点をを用いている。他方リップスの解釈学的論理学では「概念論」において、概念形成が「パラレル」という観点から生み出されるプロセスが叙述されている(田中, 2017, p 73-75参照)。概念形成においても、リップスは自らの概念形成論は通常の帰納法とは異なると述べている。帰納法では個別的な a_1 , a_2 , a_3 ……が抽象的な A として一般化されるが、リップスの言う概念形成では個別的で全く相互に異なる個別者 a , b , c ……から第3項 X が見出されるが、この X は単なる共通項ではない。 a , b , c ……から類似によって見出される暫定的な項であり、リップスはこれを「パラレル」と名づけている。この類似的な項は決して固定化されるのではなく、比喩的に述べられるに過ぎない。このようにリップスの概念形成論においてパラレルという観点をを用いているが、これはゲーテの認識の仕方と極めて類似的である。このようにリップスはゲーテ色彩論から大きな影響を受け、自らの主研究テーマである解釈学的論理学の構築に役立てている。

5 魔術的な力としての言葉

(a) 謎としての現実

さて以上のようにリップス哲学の根底に独自の実存観、さらには「諦め」があることを明らかにした。さて本論文でも繰り返し述べているようにリップス哲学の根底に「諦め」があるのであるが、同時に「謎」という視点が残っていること、そしてリップス自身「謎」という観点を重視していることを指摘した。それではリップスにとって「謎」とは何であろうか。リップスは「自然民族における現実性」(1939)年において、近代科学が普及していない地域の人々のあり方について分析し、近代科学の世界観で生きていない人々の分析を通して、人間の実存にとってそもそも現実性とは何かを明らかにしている。

リップスは「タブー」の分析を行い、そこから人間のあり方を明らかにしている。タブーに対する恐れとは、単に脅威を意味するのではないとされる。逆にタブーに挑むことは、自分の能力以上のことをしようとする越権行為を意味するのではないとも述べられている。確かにタブーに従って生きることによって、人間には自由が欠けることになるが、それは人間の限界を意味するのではない。リップスはむしろ逆に、そのようなタブーに従って生きる世界こそ、人間の実存にとっての現実性であると考ええる。確かにタブーは不可知的である。しかし人はここでタブーに従うことに、自己を「任せる」。そしてそのようなあり方に疑念を抱かず、むしろ自ら従おうとする。「むしろ起こるに任せること、我々が自らに命令するものである」（Lipps, V, S. 85）。つまり現実性は、近代的な意味での自由に生きることではなく、不可知的なものに従って生きる世界であり、むしろ人は自ら進んで不可知的なものに従おうとする。

(b) 言葉の「魔術的な力」

さらにここからリップスは「概念」について独自の論を展開している。リップスは次のように言う。「概念とは、人が物を理解したり、それを見ながら対応する巧みな捉え方である」（Lipps, V, S. 82）。我々はある語を使用する際、単に抽象的な意味において一旦概念規定してその後にその語を使用するのではない。語の使用においては、実際に想像を交えて使用することによって、概念の意味が展開されるようになる。概念は感覚とともに分節化されることによって、概念のリアルな意味が生じることになるというのがリップスの考えである。

リップスはこのような事態を「概念の感官的形成」と述べているのであるが、さらに言葉には「魔術的な」機能が備わっていることについて述べている。「言葉を通して何かを「呼び出す」ことができる。……この何かを前方に呼び出すと言うことは、自分自身に命令することを意味する」（Lipps, V, S. 84）。言葉には、人間の力では及ばない「大きな力」（vis magna）が備わっている。人間は言葉によって呼びかけられることによって、その言葉の機能が顕現する。例えば呪いのような言葉を使用するとき、その言葉は新しい意味を自ら開示

し、力をもつようになる。「人は何か言葉を「聞く」ので、それはつまり、言葉が呼びかけ、その言葉で発表されたことを他の人の中で目覚めさせると言うことを意味する」(Lipps, V, S. 85)。つまり言葉には不可思議な力があり、それは具体的な使用において顕現するのであるが、そのような魔術的な機能によって我々人間の世界が開かれるのである。

本論文ではリップスの1930年台の諸論文の分析を通して、リップス哲学の根底には独自の実存観、そして「諦め」という態度があることを明らかにしたが、さらに一層深い根底には、人間には及ぶことができない不可知な「謎」があり、それは魔術的な力によって生み出される現実性としか言うことのできない次元であるとされた。このような不可知的で秘教的とも言える根源的立場を保持することによって、リップス哲学は人間の実存の生き生きとしたあり方を明るみに出そうとしている。

【注】

- 1) ハイデガーは『存在と時間』の解釈学的循環の概念において、先行理解の枠組みに認識が閉鎖されるのではなく、新しく開放的な認識の可能性を提示しており、人間存在の遂行そのものを意味していたと溝口は述べている(溝口, 1992b, p 149-150)。しかし同時に溝口はハイデガーの解釈学が開放的な立場から、「転回」以降「有限性の根底に存在それ自身の真理の場を求めようとする」(溝口, 1992b, p 150)立場に変更したとも述べ、両者の間に大きな差異があると指摘している。リップスの立場は後者の立場に近いと筆者は考える。溝口(1992a)及び溝口(1992b)参照。

【引用文献・参考文献】

リップスの引用は下記の2冊を使用し、巻数と頁数を付記した。

Hans Lipps Werke II: *Untersuchungen zur einer Hermeneutischen Logik*, Frankfurt a. M. 1976

Hans Lipps Werke V: *Die Wirklichkeit des Menschen*, Frankfurt a. M. 1976

ゲーテ, 1810/2001 (木村直司訳)『色彩論』ちくま学芸文庫

溝口宏平, 1992a, 『超越と解釈』晃洋書房

溝口宏平, 1992b, 「第3章 2 存在—ハイデガー」丸山高司編『現代哲学を学ぶ人のために』世界思想社, p 137-150

ハンス・リップスにおける「諦め」の実存哲学（田中）

- 田中潤一，2013a「ハンス・リップスにおける自己の生成と共同的世界への参入に関する省察—解釈学的人間形成論への一考察—」第37号，関西教育学会，21-25頁
- 田中潤一，2013b「人間の認識構造におけるロゴス・パトス関係の省察—ハンス・リップスにおける解釈学的認識論から—」『長岡技術科学大学教職課程年報』創刊号，長岡技術科学大学教職課程研究会，69-81頁
- 田中潤一，2014「ハンス・リップスにおける対話と論理的思考力に関する一考察」『関西教育学会年報』第38号，関西教育学会，31-35頁
- 田中潤一，2015「ハンス・リップス解釈学における言葉と教育の考察」『関西教育学会年報』第39号，関西教育学会，21-25頁
- 田中潤一，2016a「解釈学的論理学における知識生成とその超越的根源」『大谷大学哲学論集』第62号，大谷大学哲学会，56-69頁
- 田中潤一，2016b「ハンス・リップスにおける論理生成と対話の問題」『ディルタイ研究』第27号，日本ディルタイ協会，71-84頁
- 田中潤一，2017「解釈学的論理学における方法としての「比較」—「物」，「音」そして論理へ—」，『人間形成論研究』第7号，大谷大学教育・心理学会，68-87頁
- 田中潤一，2018「「語り」からの命題の生成—ハンス・リップスにおけるトーンとロゴス—」，『人間形成論研究』第8号，大谷大学教育・心理学会，45-62頁
- 田中潤一，2022「解釈学的論理学における言語と現実性の開示」『関西大学文学論集』第71巻第4号，関西大学文学会，23-43頁
- 田中潤一，2023「解釈学的論理学の基底としての人間的自由」『関西大学文学論集』第72巻第4号，関西大学文学会，29-50頁